

# 結社誌を訪ねて

安田 青葉

こぼれ萩疾風のこごとく忌が過ぎて

雨宮きぬよ

「柵」十二月号

指折りて余命読む友秋深し

朝妻 力

「雲の峰」十二月号

「指折りて」とあると思わず五七五の字数を数えるところを連想する。ところが、この作品には朝妻氏の（十一月五日夢にて）の添え書きがあり、夢の中で余命を数える友に驚きと心配を隠せない作品となっている。「秋深し」が重く響いてくる。この作品に続いて、〈逆夢であれと秋暁覚めにけり〉と、生き延びて欲しいと願う作品がある。そして続けて〈冬日背にただばうぜんと手を合はず〉の作品が（十四日伊那男さん逝去）の添え書きと共にある。掲出句の「余命読む友」は、十一月十四日に逝去された伊藤伊那男氏のことであった。惜しんでも惜しみ切れない作者の思いの伝わってくる、胸を打たれる作品である。

脈々と周防の台地鳥渡る

染谷 秀雄

「秀」冬号

周防の台地とは、山口県の秋吉台の石灰岩台地のことであろう。このカルスト地形の始まりは、三億五千万年前に遡り、海から陸へ、現在の姿へとなる脈々とした歴史の積み重ねがある。そしてこのカルスト地形の様子も、台地を波打つように脈々としているのである。「脈々と」の措辞が時間的にも空間的にも響いていて面白い作品となっている。加えて、季語「鳥渡る」が大パノラマを繰り広げているようである。

この作品での「忌」は故人の死後の四十九日法要の忌明けまでの期間を指しているように思えた。萩が咲き始め咲き継いでいる頃に忌中に入り、疾風のように日々が過ぎた忌明けにはその萩がこぼれ始めていたのであろう。新たな哀しみが零れて積み重なっていくように思える一方、哀しみを軽やかにと、やり過ごそうとしていく様子も窺える。

冬の灯のゆらぎや銀のカトラリー

尾池 和夫

「氷室」十二月号

結婚披露宴などのパーティー会場ではないだろうか。宴はまだ始まっておらず、銀のカトラリーが白いテーブルクロスの上に整然と並べられている。そこに冬の灯が当たり、ゆらめいているのである。季語「冬の灯」の使い方としては新鮮でモダンのように思う。カトラリーの硬質な輝きを冬灯の温もりが包み込んでいる、気の利いた作品と思う。

与りしよはひいつまでいろ葉ちる

向田 貴子

「歴路」十二月号

若い頃は思いもよらなかったが、何歳頃からだろうか、行く末のことを計るようになってくる。特に秋はそんな思いに駆られることが多いのではないか。作者もいろは紅葉の散るのを見た時にふと、「与りしよはひいつまで」と口をついて出てきたのだろう。このことを作品化する時に、言葉の表現の仕方にも気持ちが入り込められている。この作品では、「与りし」の言葉の選択が良く、中七下五のひらかな表記にも心情を吐露する効果が出ていると思う。

流燈に同じ行き先ある」とし

寺島ただし

「駒草」十二月号

盂蘭盆会の終わりに川や湖に灯籠を流す行事である。連れだつて流れてゆく流燈が一つ所を目指しているかのように見えたのだろう。最終的には同じ一つ所に行きつく運命共同体のような流燈たちを思った。いつの日か、自分の魂も流燈に乗って同じ行き先に流れ着くに違いないと信じていることが思われる。

光年はまぼろしの距離梨齋る

鈴木多江子

「雲取」十一月・十二月号

光が一年かかって進む距離を一光年という。一光年は九兆四千六百億キロメートルに相当するという。従って、多江子氏が「まぼろしの距離」と表現したことは納得できる。この宇宙の非日常的なことと、ひどく日常的な「梨齋る」とを取り合わせるところが面白い。宇宙に思いを馳せながら、堅実で小さな日常ではあるけれど、かけがえのない秋の日の一瞬に浸っているのである。

どぶろくの心の隅へ及びけり

榎林 弘一

「白魚火」十二月号

どぶろくは、濁り酒、もろみ酒とも言われる日本酒である。発酵させただけでもろみを濾し取らない白く濁った酒である。飲み方としては、上澄みだけを飲むのもよし、濁らせて濃厚な舌触りを楽しむのも良いらしい。作者はどぶろくを飲んで、身体の温まることを感じた。それと共に心の隅もポツと温かくなったことを感じ取ったのに違いない。心の中にはどのような思いが潜んでいたのであろうか。どぶろくが心の隅より広がってゆき、大いに癒されてるように思える。

熊の棚会津は柿の木に満ちて

守屋 明俊

「閨」十二月号

作品として目にしたことがなかった季語「熊の棚」は、「熊栗棚を掻く」の傍題季語であり、冬ではなく秋の歳時記に載っている。熊は冬眠に備え脂肪を蓄えるため、木登りが上手なので栗の木などに登り樹上に座り、枝を折り曲げ毬をむしり食べるという。その跡が鳥の巢や座布団のように見えるので「熊の栗棚」の季語となっている。令和七年は全国で熊の被害が相次ぎ、世相を表す今年の漢字にも「熊」が選ばれたほどである。餌が足りなくて眠れず山から下りてきた熊に里の柿が随分と食い荒らされているとニュースにもなっていた。守屋氏は会津でその熊の棚を目の当たりにされたのだろう。珍しいものを見られて作品化できたことは良かったが、熊の気配に恐れながらの作句だったのではないだろうかと心配になった。

弾薬庫積乱雲の底にあり

依田 善朗

「磁石」十二月号

「横須賀七句」の前書のある作品の二句目である。横須賀軍港をめぐる、軍艦や潜水艦を見られたようである。「弾薬庫」は、現在自衛隊で使われている所もあれば、旧日本軍が使っていた今は跡地となっている所もあるようだ。この作品の弾薬庫は後者ではないだろうか。役目を果たし終え、今は雲の下のもと地の下に眠り緑地となっているのだろう。さらには都市公園や防災拠点などの平和利用が進められている所もある。今その地に、隆々とした積乱雲が立ち上がっている。この力強さが世界平和の象徴のようであればと願っている作品と思える。

（筆者住所〒165-0035 中野区白鷺三二五―一六―四〇三）